

日本水紀行(8) 中国地方の名水

島野安雄¹⁾・永井茂²⁾

1. はじめに

今回は、中国地方の5県に位置する「名水百選」およびその他の名水を取り上げる。この地域で名水百選に選ばれたのは計11ヶ所である。それらを順に挙げると、鳥取県が天の真名井(淀江町)の1ヶ所、島根県は隠岐ノ島にある天川の水(海士町)と壇鏡の滝湧水(都万村)の2ヶ所、岡山県が塩釜の冷泉(八束村)・雄町の冷泉(岡山市)・岩井(上斎原村)の3ヶ所、広島県が太田川中流域(広島市)と出合清水(府中町)の2ヶ所、そして山口県が別府弁天池湧水(秋芳町)・桜井戸(岩国市)・寂地川(錦町)の3ヶ所である。

これらの名水については、1988年から1992年にかけて現地を訪れ、採水調査を行った。この際に見聴きた事柄および各市町村パンフレットなどの資料をもとに紹介する。

2. 中国地方の11名水等の現況

2.1 天の真名井

天の真名井は、山陰の秀峰で^{ほうき}伯耆富士とも呼ばれる大山火山の北西麓に位置する淀江町にある。大山の山麓部には、富士山・阿蘇山・霧島山などの火山と同様に多くの湧泉が分布している。淀江町の中央付近、市街地からは南東方向に位置する高井谷地区に湧き出している清水が「天の真名井」である(第1図)。「天の真名井」とは、古来、『古事記』や『日本書紀』にも記載されている「清浄な水」の意で、最大の敬称をもって尊ばれた清く澄んだ水を湧き出させる泉である。なお、この「天の真名井」の名称については淀江町のみならず、全国各地に同様な名称の清水や井戸も多くみうけられる。

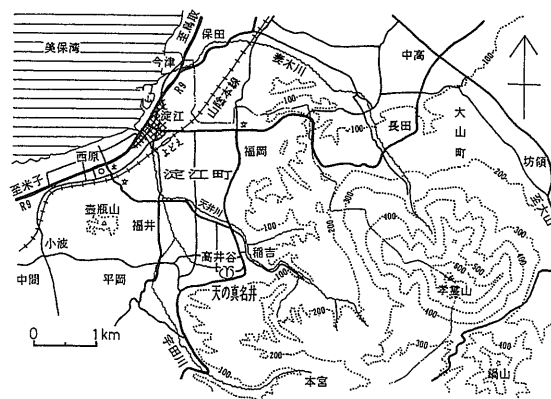
本地域の地形・地質についてみると、大山火山の北西部に位置することから、丘陵地は先大山火山岩類の高井谷溶岩およびその上を覆う鍋山火山角礫岩からなり、また丘陵地の縁辺部は古期火山麓扇状地堆積物から構成されている(猪木ほか, 1987)。

天の真名井は丘陵地の裾の部分にあって、小さな崖の下から湧き出しており、その清水は60 m²ほどの湧水池をつくっている。湧水量は日量2万5千m³ほどであり、地区住民の簡易水道源として利用されている他、灌漑水にも使われている。池から流れ出た水は泉川となり、やがて宇田川へと合流している。そして、泉川には現在も水車があり、その動力源としても利用されている。

なお、町の南東端に位置する本宮地区には、「本宮の泉」と呼ばれる湧泉がある。この湧水はあまり知られていないが、「岩清水&レモン」の清涼飲料水の原水になっている。

2.2 天川の水

島根半島から北方約45 kmの洋上には、約180余りの島々からなる隠岐諸島が位置している。このう

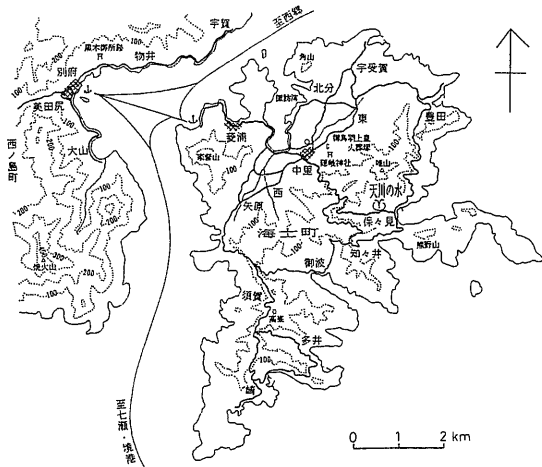


第1図 天の真名井

1) 宇都宮文星短期大学文化学科:
〒320 宇都宮市上戸祭 4-8-15

2) 元所員, 現株式会社北海ボーリング

キーワード: 名水百選, 湧水, 河川, 水環境, 中国地方.



第2図 天川の水

ち、手前南西側にあつて西ノ島・中ノ島・知夫里島の3島などからなるのが島前であり、北東側奥にあるのが島後である。名水百選に選ばれた「天川の水」は、島前の中ノ島、すなわち隠岐郡海士町保々見にある(第2図)。この海士町は半農半漁の町であるが、かつて承久の変で島流しされた後鳥羽上皇の配流の地として知られ、上皇の行在所跡や御火葬塚、隠岐神社などの史跡の町でもある。

この島前の地形・地質についてみると(猪木ほか, 1987), 外輪山・カルデラ・中央火口丘からなる火山体のカルデラ部分が沈水し、外輪山の一部分が失われて、内海を取り囲む西ノ島・中ノ島・知夫里島の3島に分かれたものとされている。これら3島は中新世の海成堆積岩類の上に後期中新世のアルカリ玄武岩類が流出して出来上がったとされ、3島ではほぼ円形の輪郭を示す。そして、外輪山をつくるのは外輪山溶岩と呼ばれるアルカリ玄武岩類で、3島の大部分を構成している。西ノ島にある焼火山(452 m)を中心として、内海と低地とが同心円上に配列している。内海に面する斜面は外海側の斜面より急であることから、島前の3島は一つのカルデラから構成され、焼火山がその中央火口丘であるとされている。この焼火山は輝石粗面岩からなり、山頂部は火山砕屑岩を伴う溶岩円頂丘とされている。天川の水のある中ノ島は外輪山の東部にあり、その大部分をアルカリ玄武岩類で構成されている他、アルカリ流紋岩や粗面岩からなる寄生火山も分布している。

「天川の水」とは、中ノ島東部の保々見地区に位置する清水寺境内の一角から湧き出る水で、この清

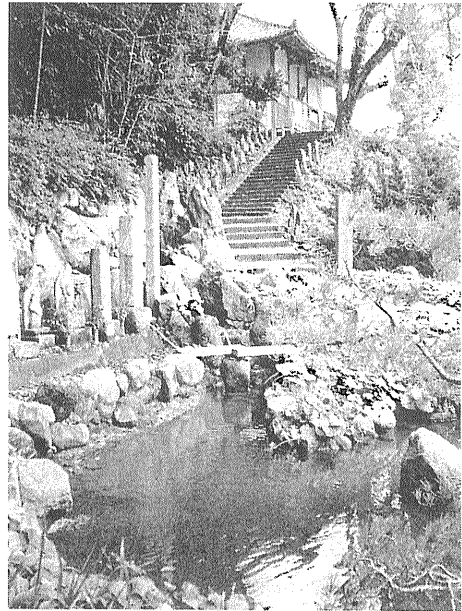


写真1 天川の水

水寺と天川の水については『昔、奈良天平の時代、僧行基がこの地を訪れた際、鬱蒼とした木陰のある洞窟から音をたてて流れ出ている湧水に靈気を感じ、そこに一字を建てて聖観世音菩薩を祀り、清水寺と号し、その水を天川(天恵の水)と名付けた』という故事来歴がある。それ以来、この地方では“湧水井戸”のことを“川”と呼び、観音信仰とともに広められた。

この天川の水は、清水寺本堂に上る石段の手前左横の崖下から湧き出している。この所はちょうど丘陵地の山裾となっている部分で、異なる地層の境目から湧き出ているものと考えられる。流れ出た清水は湧水池を作り、傍らには石仏が祀られている(写真1)。天川の水は、水温が15.5℃、湧出量が日量約400 m³ほどで、保々見地区と隣の知々井地区の簡易水道源として利用されている他、農業用水などに使われている。

2.3 壇鏡の滝湧水

島後は、隠岐諸島の中では北東側に位置し、ほぼ円形をした面積約241 km²と最大の島であつて、1町3村からなる。名水百選に選定された「壇鏡の滝湧水」は、島の南西部に位置する都万村内にある。都万村の北東端には横尾山があるが、この山の南山腹にある壇鏡神社付近に湧き出すのが壇鏡の滝湧水である(第3図)。

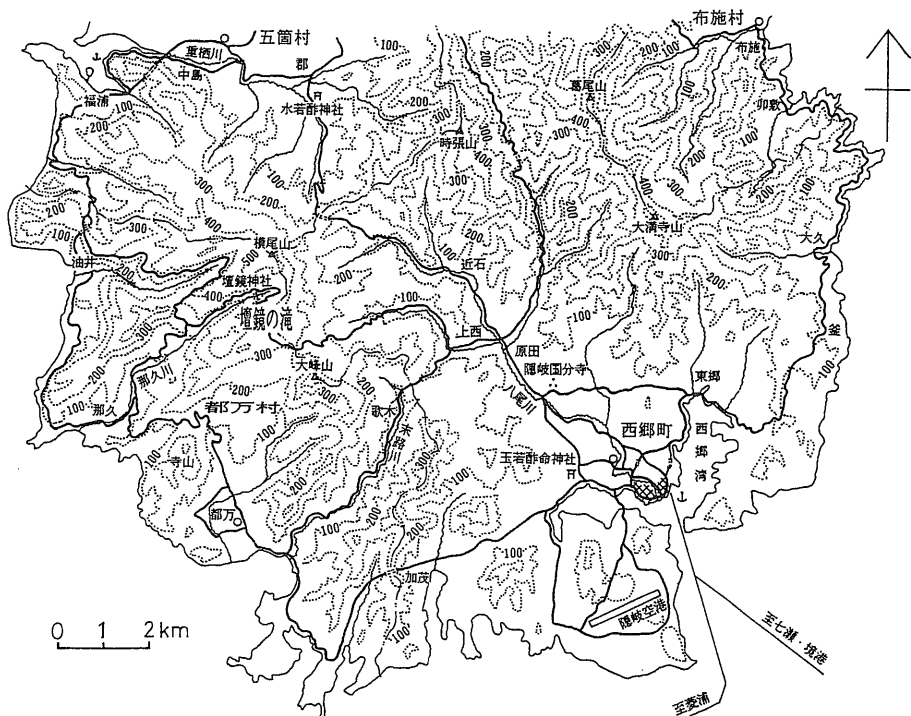
島後は直径約18 kmのほぼ円形の島で、片麻岩類・花崗岩類と中新統を覆ってアルカリ火山岩類が広く分布している(猪木ほか, 1987)。このアルカリ火山岩類は島の半分以上の面積を占めており、後期中新世以降のアルカリ火山岩系の火山活動に伴って、直径12~14 kmの環状断層をもつカルデラが形成されたと考えられている。その環状の割れ目から噴出したのが隠岐流紋岩類で、東部山塊を取り巻くように数 kmの幅で環状に分布している。そして、壇鏡の滝のある横尾山の地域は、この隠岐流紋岩類で構成されている。

都万村・西郷町・五箇村の一町二村が境を接する横尾山は、標高577 mの山で、ナラやブナの天然林が広がっている。それら天然林からの水が壇鏡神社の上方付近で清水となって湧き出している。この壇鏡神社のある所は、山腹に屏風のように岩壁がそそり立ち、湧水は滝となって流れ落ちている。この滝は「壇鏡の滝」の総称で呼ばれているが、左右に分かれて二つ懸かっている。それぞれ50 mほどの落差があるが、神社の社を挟んで向かって左のややなだらかな流れの雌滝と、右側の豪快に落下している雄滝とがある。写真2は雄滝で、裏見の滝の様

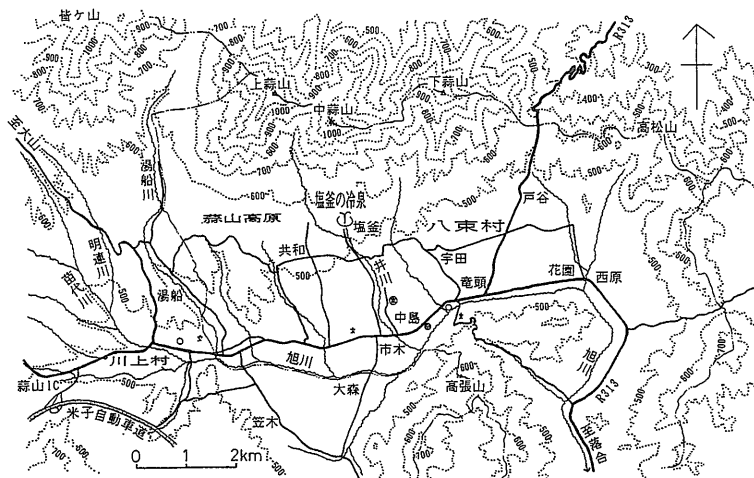


写真2 壇鏡の滝(雄滝)

相をなしている。ここでの湧水量は日量約2,500 m³ほどで、下流の那久地区の簡易水道源として利用さ



第3図 壇鏡の滝



第4図 塩釜の冷泉

れる他、農業用水や椎茸栽培の灌水などに使われている。流れ落ちた水は壇鏡川となって流下し、そして他の河川と合流し那久川として日本海に注いでいる。

この壇鏡の滝湧水については、平安時代の承知年間(834~847年)の頃、隠岐へ配流された遣唐副使の小野篁が赦免になって帰京できるように自ら一心不乱になって祈願した場所として伝えられている。そして、勝利の女神が棲む水とのことから「勝者の水」と崇められ、隠岐名物の闘牛大会や古典相撲大会に出場する者達は、その早朝にこの水で身体を清めることが慣習となっており、今でも続いているとのことである。また、「長寿の水」あるいは「火難防止の水」としても島民に崇められている。

2.4 塩釜の冷泉

塩釜の冷泉は、岡山県北西部の蒜山高原ひるぜんの八束村に位置する湧泉である。この蒜山高原は、大山隠岐国立公園の一角を構成しており、瀬戸内海に注ぐ旭川の源流域となっている。ここ蒜山高原は“高原”と呼ばれてはいるが、北には蒜山の三座(上蒜山・中蒜山・下蒜山)をはじめとする火山群が、また南には中国脊梁山地の山並みを連ねた山地部があり、平均標高がおよそ500 m前後で、東西約20 km、南北約10 kmの細長い舟底状の地形、すなわち実際には山間盆地の形態を呈している。そのためか、岡山や落合の方から蒜山高原に入るには旭川沿いに遡り、湯原峠を越えてくることになる。

この蒜山高原および周辺の地形・地質状況につい

てみると(西垣・島野, 1991), 蒜山高原は中国山地の主稜よりも北側に位置するが、標高1200 m級の蒜山火山群の噴出により、旭川の源流部を構成している。蒜山火山群は、大山火山の南東にあって、更新世前期に活動した火山で、ほぼ東西に並ぶ山体は安山岩質溶岩流と凝灰角礫岩類からなり、山麓部には崖錐堆積物が分布している。そして、盆地の底部には蒜山火山・大山古期火山の噴出により生じた古蒜山湖に堆積した湖成層である蒜山原層があり、これを覆う形で段丘砂礫層や火山灰層が堆積している。盆地底部には水田が広がっているが、かつては原野で明治時代に軍馬の放牧場にも使われた蒜山の山麓部は、第2次大戦後に開拓されて、現在は酪農や野菜栽培が盛んに行われている。

塩釜の冷泉そのものは、蒜山火山群のうちの中蒜山の山麓部にある湧泉で、標高約520 mの所に位置していて、旭川の支流の井川の一つの源泉になっている(第4図)。この湧泉は、地元の人々からは「塩釜さま」とも呼ばれていて、ひょうたんの形をした面積約60 m²ほどの湧水池を形成している。池の底では数カ所で砂を巻き上げながら水を噴出している様子が見られる。この湧泉は、地下深部の“水みち”と呼ばれる通路を長い距離にわたって流下してきて自噴する湧出タイプの泉である。一般に池状泉となっているものの多くは、この種のタイプの湧泉である。湧水池より勢いよく流れ出てくる清水は清冽であり(写真3)、湧水温も年間を通じて10~11℃と低温である。この塩釜の冷泉の水温が位置

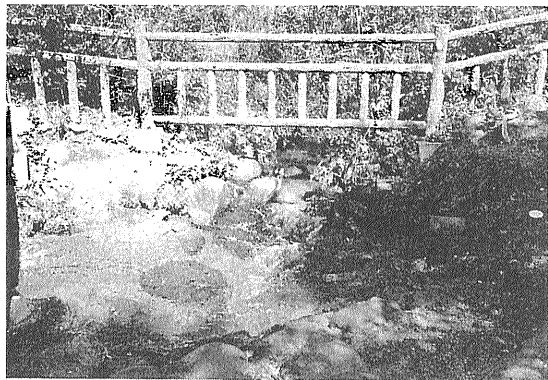


写真3 塩釜の冷泉

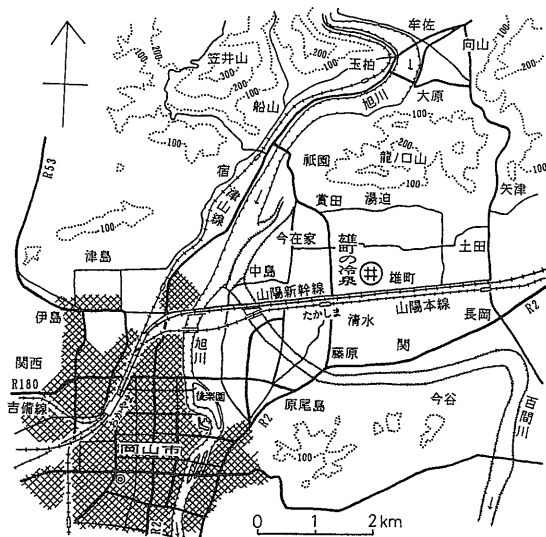
する標高にしては低いのは、涵養域が高い所であり、長い距離を流下してくるといふ湧出機構と関連している。湧出量は毎秒300 l(日量約25,000 m³)と豊富であり、村内の生活用水の他、養魚場や農業用水などに利用されている。そして、養魚場は冷泉の流れ出たすぐ先にあつて、ヤマメやマスが養殖されており、魚釣りを楽しむこともできる。

なお、この蒜山高原一帯は、スキー場・キャンプ場・牧場やスポーツセンターあるいは国民休暇村などの施設が整っており、「西日本の軽井沢」とも呼ばれている。最近、中国自動車から分岐した米子自動車道が開通したため、この地への行楽はより便利になった。

2.5 雄町の冷泉

雄町の冷泉とは、岡山市の中心街からは約5 km北東方向のJR山陽本線の高島駅と東岡山駅のほぼ中間に位置している浅井戸のことである(第5図)。現在、この雄町地区は住宅地になっており、井戸は今井松男さんの家の庭先にある。今井氏は6代目の水奉行と自称されており、雄町の冷泉の管理を行っている。

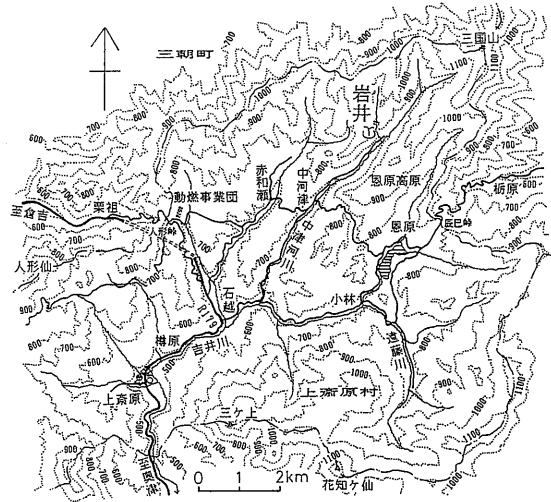
雄町の冷泉のある辺りは、旭川とその分流である百間川によって形成された海岸平野である。旭川は、昔、この辺りを自由に流れていたようで、その伏流水の一つが雄町の冷泉である。この付近の地質については、下位に洪積世の砂礫層があり、その上に透水性の悪い沖積層がのっている(西垣・島野, 1991)。この砂礫層については上・下で透水性に差がみられる。透水性の良い上部砂礫層は、下部とは透水係数が1オーダー異なっていて、この地域の主要帯水層を形成している。



第5図 雄町の冷泉

しかし、この雄町の冷泉付近で井戸を掘れば、すべて良質な水が出るとは言えないようである。この周辺の地下水には鉄分を多く含むものがみられるという。このため、地盤掘削工事の際には地下水位を下げ排水を行うが、その排水中に鉄分が酸化してしまうため、排水処理には多額の費用が掛かるとのことである。そして、雄町の冷泉付近の地下水位についてみると、豊水期と渇水期では2~3 m近く水位が異なるが、水位の変化は水田への灌漑水の影響が大きいとされている。雄町の冷泉の井戸については、豊水期の夏場には地表面下20~30 cmの所に水面がみられるが、自噴しているわけではないとのことである。また、この雄町の冷泉の井戸構造についてみると、表層は長方形の石組みの浅井戸となっているが、井戸の周辺から雑水が入らないように、ある程度の井戸壁の深さまでは山土と石灰とで周囲を固めてあり、下からの湧水だけを取り入れるようになっているとのことである(今井氏の話)。

ところで、雄町の冷泉については、次のような由来・経緯がある。『この雄町の冷泉の井戸は、江戸時代の岡山藩・池田家の御用水として知られる。この井戸が掘られたのはおよそ300年前のことで、藩主池田綱政が津田永忠に命じて整備したとされる。この井戸水を雄町から岡山城までの道のりを運ばせたとされ、“殿様井戸”あるいは“御前点前の井戸”とも呼ばれていた』という。そして、上道郡誌によれば「面積約900坪の芝生の中央に井戸あり、屋根



第6図 岩井

を設け、水奉行を置いて監視せしめたり」との記述がある。また、岡山水道誌によると、「明治半ば頃まで世襲の水奉行が厳重に管理し、庶民の口にはめったに入らなかった」とある。

しかしながら、この雄町の冷泉でも、一旦、名が知られると水を汲みに来る人々で大いに賑わいを見せる。名水百選に選ばれる以前は、井戸だけポツンとあり、訪れる人もほとんどなかったが、選定以後は汲み上げポンプを取り付け、井戸の上に四阿を掛けたりしていると、水汲みに来る人々も増えてきた。最近では、平日でも500人、日曜日や祭日などは1000人に近い人が集まって来ていた。だが、このように大勢の人々が集まって来るようになると、水汲みの長い行列という混雑の他に、無法駐車で周辺の道路や空き地も混雑し、付近の住民にも迷惑がかかることが多くなったという。そのためか、つい最近(1992年10月)になって、揚水ポンプの電源を切って水を汲めないようになったとのニュースをテレビで視聴したが、昨今の事情を考えるとやむ終えない措置であると思える。

2.6 岩井

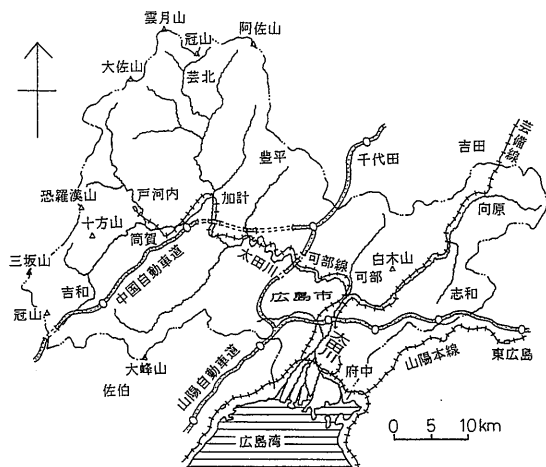
「岩井」とは、岡山県最北部の鳥取県境の上斎原村にある湧水のことで、吉井川の最上流部を構成する中津河川の流域にあり、中国山地の主稜で分水嶺の一つになっている三国山(1,252 m)の南西麓に位置している。この岩井の湧水は上斎原村役場のある中心地からは北東方向にあり、ウラン鉱で有名な人形峠に向かう国道179号線を石越で右に折れ、中津

河川沿いに約7 kmほどの道のりを遡って行った所にある(第6図)。岩井の湧水は駐車場の所から5分ほど登った所にあるが、さらに5分ほど登った所には「岩井の滝」と呼ばれている落差5 mほどの滝が懸かっている。

上斎原村の北東部に位置する山地には、後期中新世～鮮新世の火山岩類が分布している(猪木ほか, 1987)。これらは三郡変成岩・後期中生代の火成岩・中新世の鳥取層群などを覆い、三朝層群と呼ばれていて、主にアルカリ岩系の玄武岩類とカルクアルカリ岩系の安山岩～デイサイトからなる。この三朝層群は、塩基性のものから酸性のものへという火山岩の化学組成の変化に基づき下位から、人形峠累層・東郷累層・阿波累層の3層に区分される。最も広く分布しているのが東郷累層で、三つの累層の中では最も多くの火山岩類を含み、中津河凝灰角礫岩と呼ばれている。この角礫岩は、岩井の湧水の辺りの地域にも広く分布している。また、岩井の湧水よりも少し標高の高い所に懸かっている岩井の滝は、この地域で“通り岩”と称されている安山岩類の部分に形成されている。この安山岩の岩盤が突き出ていて岩屋を作り、“裏見の滝”の様相を呈している。そして、岩屋の部分には祠が建てられてあり、不動明王が祀られている。

名水「岩井」の清水は、この岩井の滝から約100 mほど下った所にあり、角礫岩等の岩の間より湧き出ていて、水温は10～11℃、水量は毎秒1 lほどの裂隙泉タイプの小さな湧泉である。そして、この「岩井」の清水に関しては、次のような物語が伝えられている。『昔、この地に忠左衛門という人が住んでいたが、妻が40歳になっても子宝に恵まれなかったので、岩井滝不動に願掛けをし、お告げによって岩井の水を21日間飲んだところ、翌年の7月10日に可愛らしい女の子を授かった。そして、娘は美しく成長し、隣村から養子を迎え、家業の木地挽によって長者となった』といい、現在でもこの地に長者屋敷という地名が残っている。そこで、この故事から娘の生まれた7月10日を岩井滝祭りと定め、岩井の清水は美と健康・子宝に恵まれる水として語り継がれている。そして、岩井滝不動に詣でる際には、この清水で必ず口をすすぎ、心を清めてから登っていくしきたりとなっている。

2.7 太田川(中流域)



第7図 太田川流域の位置図

太田川は、中国山地に源を発して広島湾に注ぐ幹川長約103 km、面積約1,700 km²の中規模河川である。太田川は6本の大きな支流から構成されており、上流には立岩・榑床・王泊という三つのダムがあり、また江ノ川水系の土師ダムからの発電用放流水も合わせて流下し、瀬戸内海に注いでいる。そして、この太田川は中下流部では百万都市である広島市を貫流しているが、広島市の中心部は太田川につくった三角州の上に発達した街で、毛利氏が1580年代末に築城して以来、海に向かって干拓地・埋め立て地をつくり、街づくりをしてきたところであり、水の都としても知られている(小出, 1972)。なお、分流した太田川は、市街地の中を太田川放水路・天満川・太田川本川・元安川・京橋川・猿猴川の6筋となって流れている。

名水に指定された太田川中流域とは、広島市安芸南区にある祇園水門から上流の行森川合流点までの約18 kmの区間である(第7図)。この区間の上流側半分は兩岸に急峻な山々が迫り、太田川は曲流しながら流れ下っている。可部より下流では川幅を広げ、三条川と合流して後はやや広い谷底平野を流れ下る。やがて、広島平野へ出てからは分流し、デルタ地帯を形成している。そして、祇園水門より少し上流側の河川敷などにはゴルフ場や野球場、あるいは親水公園が整備され、レクリエーションの施設が設けられている。また、もう少し上流には高瀬堰があるが、この高瀬堰には高陽・八木の上水道用の取水口が2ヶ所設けられてあり、ここで取水された水は広島市全域の他、呉・東広島・竹原の各市や島

嶼部まで給水されている。

次に、太田川流域の地質についてみると、主として白亜紀の火山岩類・貫入岩類と中生界のチャート・泥岩などの堆積岩類から構成されている(地質調査所, 1992)。特に、広島市周辺の山地には、いわゆる広島花崗岩と呼ばれている貫入岩類が広く分布している。このため、太田川水系の水はミネラル分の少ない軟水をはぐくんでいるといわれている。しかしながら、近年、安佐南区や安佐北区に大規模な住宅地が開発されたことにより、生活排水などの影響で河川水の汚染・汚濁が進行してきているとの危惧もあり、人口稠密地域を流れる河川に共通する宿命みたいなものを感じる。

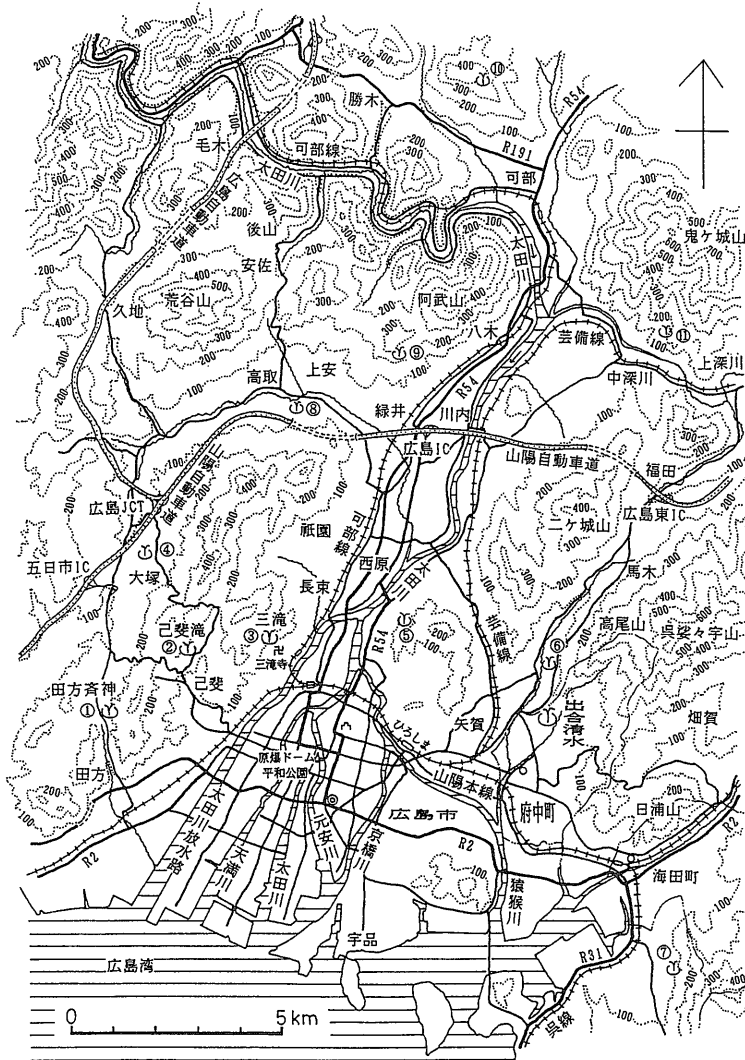
2.8 府中の出合清水と広島原爆の水

「出合清水」は、広島市の東隣というか広島市の南区・東区・安芸区に囲まれて位置する安芸郡府中町の石井城地区に湧き出している清水である(第8図)。地元では“東川の泉”とも呼ばれ、町の北東に位置する呉娑々宇山に源を発する榎川が水分峡と呼ばれる山峡の地から平地に流れ出る際に、地下に浸み込んだものが清水として湧き出しているといわれている。

この出合清水の位置する辺りは、現在、住宅地になっており、家屋が密集している。地形的には石井城という地名に由来するように、中世にはこの台地の上に石井氏の城があり、出合清水は台地の縁辺部に自然湧泉として存在していたようである。また、この辺りの地質については、広島花崗岩の基盤の上に10~15 mほどの砂礫やシルト層が堆積しており、その上に表土がのっている状況となっている(佐々木ほか, 1992)。したがって、出合清水は榎川の伏流水がその砂礫層中を流下してきて、地形の変換点で湧き出したものといえる。水天宮を祀った岩の下から湧き出し、飲料用・食物洗い・洗濯用の3層に区分けされた湧水池へと流れ落ちている(写真4)。

次に、名水百選ではないが、広島市には“原爆の水”と呼ばれている名水がある。これは原爆記念日の8月6日に毎年行われている平和記念式典に献水として用いられる水のことである。

1945年8月6日の朝、原爆投下で被爆し、火の海の中を逃げ惑い、水を求めてさまよい歩いたにもかかわらず、水が得られずに息絶えた人々もかなり



第8図 出合清水と原爆献水

多かったという。この多くの犠牲者の霊を慰めるために、平和記念式典の際に清冽な水を献ずる儀式が原爆献水である。この原爆献水に用いられる水は、現在、市内16ヶ所の場所から採水されている湧水・井戸水などである。それらは佐々木(1989)によると、田方斉神①・己斐滝観音②・三滝③・屋代・大塚④・相田⑧・毘沙門天⑨・福王寺⑩・小河内・中深川⑪・天水⑤・清水谷⑥・白木秋山・阿戸原山・矢野尾崎⑦・高陽浄水場の水とされている。これら原爆献水の一部については、第8図に①から⑪の数字として示してある。そこで採水された水は集められ、8月6日の式典前に木桶に入れられ、地区の代表者によって慰霊碑前に捧げられる。な

お、献水そのものは古くから遺族それぞれが行ってきっていたが、正式に広島市の行事として行われるようになったのは1974年からで、これは同じ被爆地である長崎で行われていた献水儀式を参考に始められるようになったとされている。

原爆献水の中で、田方斉神・己斐滝観音・三滝の3ヶ所の地について訪れてきたので次に紹介する。これらはともに広島市西部の西区にあり、武田山山系の広島花崗岩類からなる丘陵地に位置している。

田方斉神の水は、別名“山田の霊水”とも呼ばれていて、草津沼田道路の峠近くに位置する霊泉寺の境内にある井戸水である。かつてはお寺の裏山から清水が湧き出していて、万病に効く霊泉として知ら

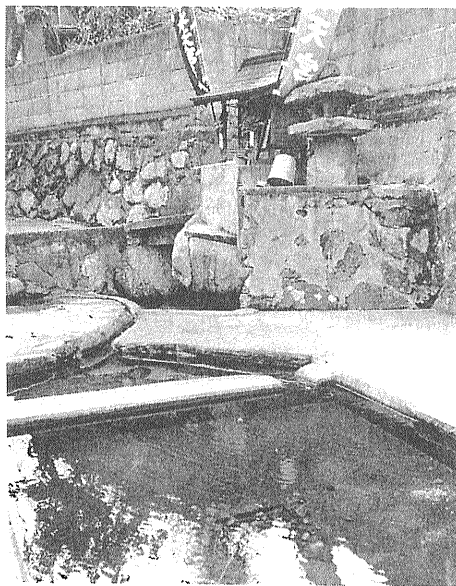


写真4 出合清水

れ、多くの人々が訪れていたという。しかし、近くを通る山陽新幹線の己斐トンネル工事以後涸れてしまい、今は井戸を掘りポンプで地下水を汲み上げている。

己斐滝観音は己斐上5丁目の住宅団地の裏山にある。広電バスの終点から山道を5分ほど歩くと観音堂があり、その奥まった所の先に注連縄が張られ、落差5mほどの小さな滝が懸かっている。滝から流れ落ちる水はさほど多くはないが、行場となっていて、傍らにはお地藏様も祀られている。

三滝の名水とは、JR 可部線の三滝駅の西に位置する三滝寺境内にある滝の水である。この三滝の地名の由来は、幽明・梵音・駒が滝の三つの滝があることから名付けられたという。1945年8月6日の原爆被爆の際には、爆心地から3kmほどの距離でもあり、また水が豊かだったことから水を求めて多くの人々が避難してきたという。そして、この地で力つき亡くなった人も多く、多数の無縁仏が祀られてあり、原爆と特に縁の深い寺でもある。

2.9 別府弁天池湧水

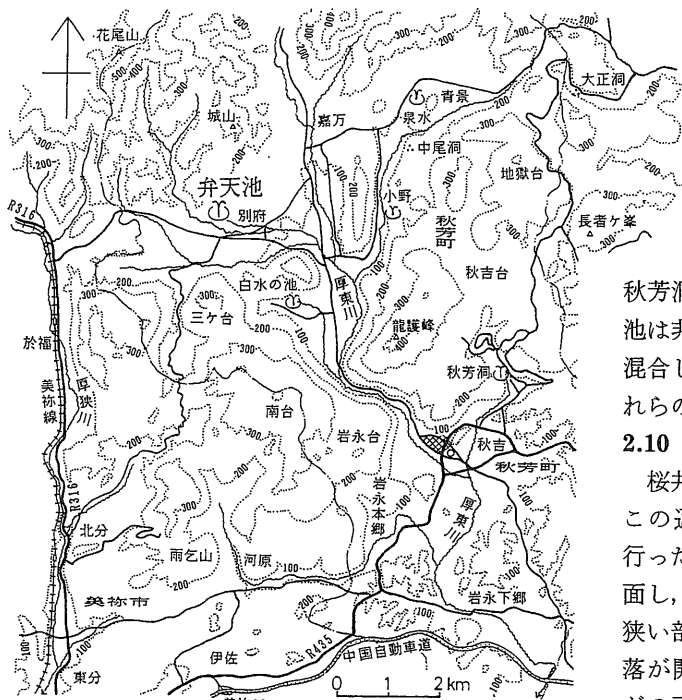
別府弁天池は山口県秋芳町の別府地区、すなわちカルスト地形で有名な秋吉台の北西部に位置する湧水池である(第9図)。

秋吉台(広義)は標高350m前後の二疊紀の石灰岩層からなる台地で、中央部をほぼ南北に流れる厚

東川によって東西二つのカルスト台地に分けられるという(藤井, 1988)。東の台は観光地として人々が多く訪れる狭義の秋吉台と中の台・猪出台、また西の台は於福台・岩永台・江原台から構成されている。そして、これらカルスト台地では雨水や地下水により侵食・溶食され形成された石灰洞・鍾乳洞が数多く発達している。また、一般に、カルスト地域では地下水は特異な挙動や流動形態を示すことが知られている。東秋吉台には北部と南部にそれぞれ大きな地下水系が発達していて、その一つが秋芳洞から流出する地下川である。また、西秋吉台には三つの大きな地下水系があり、北部を主な集水域としている白水池を流出口とするものが最も大きいとされ、西側を流れる厚狭川の一部がこの水系に争奪されている。そして、別府弁天池に湧く水など、北方の非石灰岩山地を集水域とする河川の水の大半も西秋吉台の北麓で伏流して、この白水池の水系へと流入してきているといわれている。なお、このカルスト台地の周辺には、秋吉石灰岩層を取り巻くように非石灰岩質古生層と中生層が分布している。別府弁天池のある辺りおよびその涵養域は、二疊紀に堆積したと考えられている別府層群と呼ばれるチャート・砂岩・頁岩より構成されている。

別府弁天池は、西秋吉台の北方に位置する別府水上地区の厳島神社境内にあって、杉木立に囲まれた周囲約40m、水深約3mほどの円錐形をした池である(写真5)。池の底や四周から湧き出た清澄な地下水は、中央の深みでは淡いエメラルドグリーンの美しい水景観を呈している。水温は年間を通して約14°Cと一定しており、また湧出量は日量約5万m³と莫大な水量を誇り、地区住民の簡易水道源の他、農業用水や町営養鱒場の用水などに利用されている。

ところで、この弁天池については次のような言い伝えがある。『昔、この辺りに別府の長者という者がいて、林を切り開き、農地を開墾したものの、水がなく困っていたところ、ある夜に「これより北にある弁財天を勧進して祭りをすれば、必ず神の恵みがある」との諏訪明神のお告げがあった。そこで、早速、社を建立し、祭りや神楽を奏した後、明神からの夢枕で授かった青竹を杖にして水源を探したところ、にわかには水が湧き出した』というものである。そして、地区の人々は、この神与の水に感謝し



第9図 秋吉台周辺の位置図

秋芳洞・泉水・小野の水は石灰岩質の水，別府弁天池は非石灰岩質の水であるが，白水池の水は両者の混合した水であり，溶存成分や電気伝導度の値がそれらの中間の値を示している。

2.10 桜井戸

桜井戸は，山口県東部の岩国市通津地区にある。この通津地区は岩国の中心街からは南に約12 km 行った由宇町境にあり，東側は瀬戸内海の安芸灘に面し，西側はすぐ後ろに山が迫っていて，その間の狭い部分に国道188号線と山陽本線が通っていて集落が開けている。桜井戸は通津駅の北約500 m ほどの所にあり(第10図)，地形的には通津川の運んだ堆積物からなる海岸部の沖積地に位置している。また，背後の山地は白亜紀の花崗岩類より構成されている。

この桜井戸は，一辺が65 cm ほどの四角形の井桁からなり，深さが2 m ほどの浅い井戸で，屋根がかけられている(写真6)。そして，桜井戸の名称の由来は，かつて周辺が桜の名所だったことから命名されたものといわれている。井戸と名が付けられているが，実際はこの北側を西から東に流れ瀬戸内海に注いでいる通津川の伏流水が沖積地から湧き出しているもので，水量は日量50 m³程度と多くはないが，どんな日照りの際にも涸渇することなく，たえず水を湧き続けている。

この桜井戸の水は，古くから地区の飲料水の他，瀬戸内を航行する船舶の飲料水にも使われたという。そして，桜井戸の水は茶会用の水として，茶人に愛用されてきている。これは江戸時代初期に，有名な茶人で隣藩浅野家の家老でもある上田宗箇宗匠が初代岩国藩主の吉川広家に招かれた折，この桜井戸の水をこよなく愛でたことにより，以後近郊の茶会の席にはこの水が用いられるようになったといわれている。さらに，この水を若水として飲むと長寿の薬にもなると言い伝えもある。

2.11 寂地川

て，毎年9月の第一日曜日に行われる叡島神社の祭礼(通称弁天祭)には念仏踊りを奉納している。

なお，この別府弁天池の水は，砂岩・頁岩を伴いチャートを主とした非石灰岩質古生層の山地からの地下水が湧き出してきている。つまり，カルスト台地の地下水系とは異なる独立した地下水系をなしている。そこで，比較のために，石灰岩質を主とする秋芳洞の地下川や白水池などの地下水も採水し水質分析を行ってみた。第1表にみられるように電気伝導度の値や溶存成分量にかなりの差がみられる。

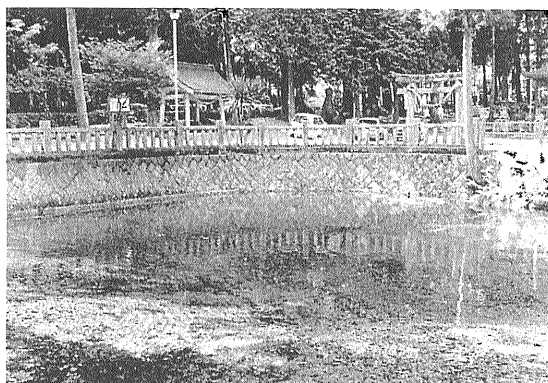
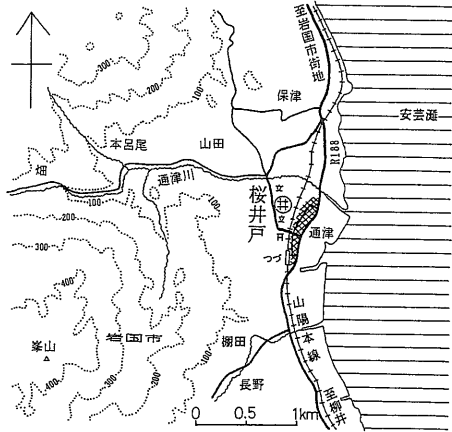


写真5 別府弁天池



第10図 桜井戸

寂地川は、山口県の東北端に位置する錦町を横切って流れる錦川の支流宇佐川の一つの溪流である。錦川そのものは、流路延長約124 km、流域面積約925 km²の中規模河川であるが、東西の流路と南北の流路を組み合わせた複雑で大きな蛇行を行いながら流下しているため、面積の割には流路が長いのが特徴である。この錦川は岩国市で瀬戸内海に注いでいるが、岩国市内で日本三大奇橋の一つ“錦帯橋”が架かっている河川として知られている。

宇佐川の流域は錦町の北東部を占めていて、その最上流部に寂地川があり、この地域は西中国山地国定公園の一角を形成している。この寂地川は、山口県下の最高峰であり、また山口・広島・島根3県の県境の地となっている寂地山(1,337 m)にその源を発している(第11図)。犬戻峡・寂地峡などの渓谷から流れ下る水は清澄で豊富である。これらの渓流水は地元住民の飲料水として用いられている他、錦町の特産品であるワサビの栽培にも利用されている。そして、それらの渓谷沿いには奇岩・怪石の変化に富んだ風景が展開し、また大滝・竜尾滝・登竜滝・白竜滝などの多くの滝が連続して懸かっている。「日本の滝百選」にも入っている。なお、寂地川を含めた宇佐川流域の地質は、後期白亜紀の花崗岩類と中・上部二畳紀の砂岩と頁岩の互層を主体とする錦層群とから構成されている。

さて、“寂地”という地名について、これは仏教の「寂滅」や「石神」という言葉から名付けられたといわれているが、この宇佐地区には古くから「寂地の高僧」と呼ばれる次のような伝説もある。『そ

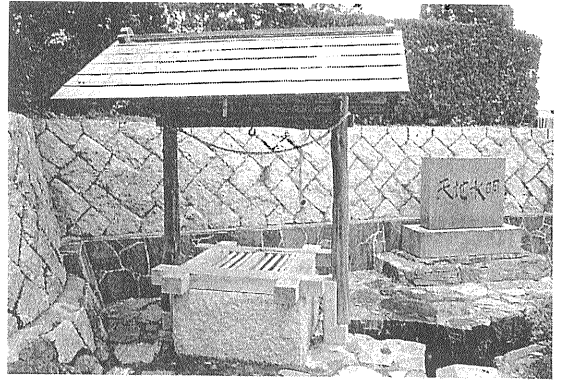
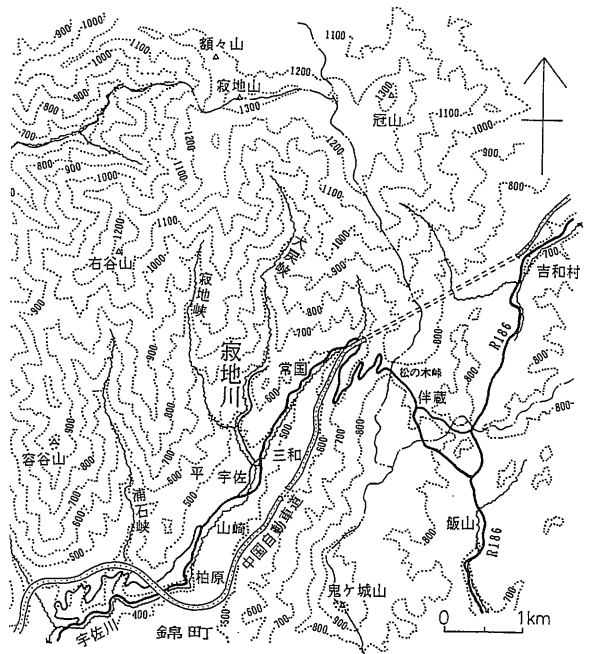


写真6 桜井戸

の昔、寂地山に恐ろしい大蛇が棲んでおり、宇佐の村人を悩ましていた。ある時、一人の旅僧が村に現れ、村人の話を聞き、災いを除くために、村人が山上に建てた「寂林院」というお寺にこもり、大蛇を退散させるための荒行を行った。すると大蛇は旅僧の法力に屈し、山を去り遠く安芸の臥竜山に逃げたという。そして、旅僧はいずれともなく姿を消してしまいましたが、村人達はこの僧の遺徳を偲び、寂林寺の山号「寂地山」として、この山一帯を寂地山と呼んだ』といわれている。また、奈良時代の名僧行基が全国行脚の折、この寂地峡の清浄な水で斎戒沐浴して身を清め修行を積んだ際に彫刻したとされて



第11図 寂地川

第1表 中国地方の名水等の水質分析結果

番号	名水の名称	所在地	水源	年月日	電気伝導度 ($\mu S/cm$)	水温 ($^{\circ}C$)	pH	RpH	アルカリ度 (mg/L)	Cl ⁻ (mg/L)	SO ₄ ²⁻ (mg/L)	NO ₃ ⁻ (mg/L)	Na ⁺ (mg/L)	K ⁺ (mg/L)	Ca ²⁺ (mg/L)	Mg ²⁺ (mg/L)	SiO ₂ (mg/L)	計 (mg/L)
63	天の真名井	鳥取県淀江町	Gw	900923	107.9	13.9	6.6	7.0	36.5	13.1	2.9	0.9	10.9	1.3	6.5	4.3	32.9	109.3
64	天川の水	島根県海士町	Gw	900925	235.6	15.5	6.8	7.0	41.0	45.0	5.6	0.0	22.3	2.0	14.4	5.0	38.7	174.0
65-a	壇鏡の湧水	島根県都万村	Sp	900924	106.1	14.5	6.6	6.8	16.5	18.7	4.3	0.0	11.7	4.2	3.2	1.4	45.9	105.9
65-b	壇鏡の滝(川)	島根県都万村	S	900924	74.3	18.5	7.0		6.0	15.2	4.8	0.2	10.2	1.6	1.3	1.2	15.4	55.9
66	塩釜の冷泉	岡山県八束村	Sp	900922	72.0	10.5	7.1	7.2	21.5	3.9	0.8	0.0	5.2	0.9	4.5	1.5	28.2	66.5
67	雄町の冷泉	岡山県岡山市	Gw	900502	168.3	16.0	6.0	6.7	43.0	10.6	16.3	3.6	9.3	1.2	14.2	5.0	22.6	125.8
68	岩井	岡山県上斎原村	Sp	900922	50.1	10.4	6.6	6.8	14.5	6.0	1.1	0.4	4.5	0.9	2.7	1.4	18.6	50.1
69	太田川	広島県広島市	R	900926	73.8	20.3	6.9		17.5	5.4	4.8	2.1	5.2	1.0	5.5	1.0	13.7	56.2
70	出合清水	広島県府中町	Sp	900926	234.6	20.5	6.0	6.8	50.5	18.6	15.1	24.1	15.7	4.4	23.7	2.4	26.4	180.9
①	田方斎神	広島県広島市	Gw	920726	117.4	22.5	6.0	6.6	35.0	9.8	10.1	5.8	9.6	1.1	10.1	1.3	23.7	106.5
②	己斐滝	広島県広島市	S	920726	79.5	20.0	6.8		18.0	6.1	10.9	0.3	8.9	1.4	4.5	0.7	23.2	74.0
③	三滝	広島県広島市	S	920726	121.3	19.6	6.8		42.0	5.3	9.4	3.8	9.6	1.4	11.5	1.8	28.8	113.6
71-a	別府弁天池	山口県秋芳町	Sp	880804	140.0	14.5	7.2	7.4	56.7	7.0	3.6	1.2	5.5	0.6	21.7	1.6	8.9	106.8
71-b	白水の池	山口県秋芳町	Sp	871213	240.0	13.2	7.2	7.4	95.2	8.5	5.8	3.9	5.5	1.3	37.0	1.3	7.1	165.6
71-c	小野	山口県秋芳町	Sp	871213	325.0	13.5	7.2	7.4	154.0	5.5	3.2	1.6	4.0	0.6	59.8	0.8	4.9	233.8
71-d	泉水	山口県秋芳町	Sp	871213	370.0	14.9	7.0	7.1	172.1	10.9	8.5	6.4	7.3	1.0	66.7	2.6	9.0	284.5
71-e	秋芳洞	山口県秋芳町	Sp	861117	303.4	14.0	7.2		117.9	8.6	4.3	5.8	5.7	2.3	51.2	1.1	6.9	203.8
72	桜井戸	山口県岩国市	Gw	900926	137.7	19.5	6.0	6.7	36.0	6.7	10.8	4.9	6.3	2.0	13.6	2.7	19.0	102.0
73	寂地川	山口県錦町	R	900927	28.7	15.8	6.7		5.0	2.4	2.7	0.5	2.9	0.2	1.3	0.3	9.2	24.5

いる聖観音菩薩も近くに安置されており、古くから観音示現の霊場として広く信仰されている。

3. 水文化学的特徴

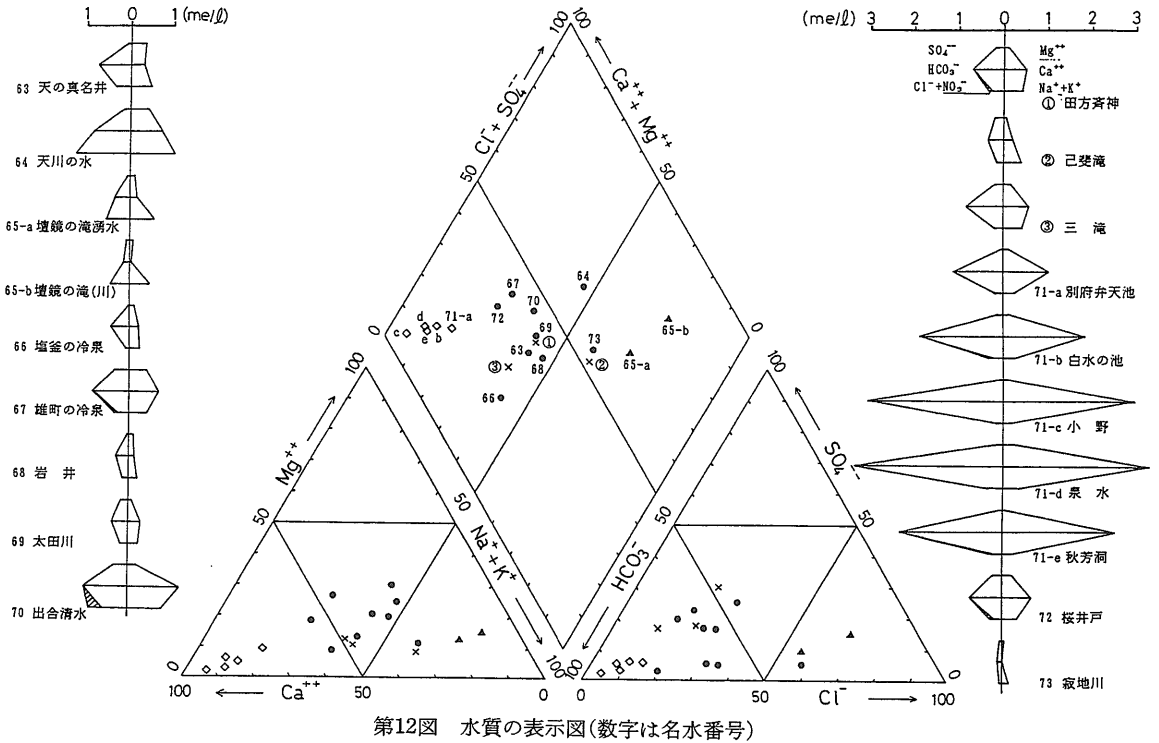
これらの名水の水質の特徴に関して次に述べる。採水はそれぞれの名水によって異なるが、1~3回行った。水温・電気伝導度(25°Cに換算)・pH等は現地において採水時に測定を行った。また、アルカリ度(HCO₃⁻)・Cl⁻・SO₄²⁻・NO₃⁻・Na⁺・K⁺・Ca²⁺・Mg²⁺・SiO₂などの主要溶存成分については、ポリビンに採水して持ち帰って分析を行った。その結果の一部を表したのが第1表(番号は名水番号)であり、またこのデータをもとにキーダイアグラムおよびヘキサダイアグラム表示で表したのが第12図である。

電気伝導度についてみると、300 $\mu S/cm$ を超えるものがあるが、これらはカルスト地域の水である。また、壇鏡の滝・塩釜の冷泉・岩井・太田川・寂地川などは100 $\mu S/cm$ 以下となっている。湧水温については10~20°Cと広範囲にわたるが、15°C前後のものが多い。なお、井戸水については採水時のポンプアップの関係で必ずしも正確な水温であるとは限らない。pHについては6.0~7.2の範囲であるが、7.0前後のものが多い。そして、溶存成分の合計量については、少ないものから多いものまで10倍以上の開きがあり、特にアルカリ度(HCO₃⁻)については大きな値を示すものがある。また、SiO₂については天の真名井・天川の水・壇鏡

の湧水で30 mg/lを超えたが、それ以外は低く、特に別府弁天池や秋芳洞などでは10 mg/l以下と低い値である。

次に、水質組成についてみると、Ca-HCO₃型が多いが、Na-Cl型やCa-SO₄型もあり、かなりバラエティーに富んでいることがうかがえる。天の真名井はややMg²⁺成分の割合の多い水である。天川の水や壇鏡の滝の水は、ともに周りを海に囲まれた島にあることから、Na⁺とCl⁻成分が多いのが特徴である。塩釜の冷泉・岩井・太田川はCa-HCO₃型の組成で、ともに成分量の少ない水である。そして、雄町の冷泉・出合清水・桜井戸についてもCa-HCO₃型の組成であるが、それぞれの成分量については塩釜の冷泉などよりはかなり多い。原爆献水については、田方斎神と三滝はほぼ同じ水質組成を呈しているが、己斐滝の水はNa⁺成分の割合が高くそれら二つとは異なる。別府弁天池の湧水についてはCa-HCO₃型を呈するが、秋芳洞・小野・泉水という石灰岩質地域の水とは幾分異なる組成を示している。また、白水池は別府弁天池湧水などの非石灰岩質の水と石灰岩質地域の水が混ざり合って地下を流れてきて湧出しているとされているが、水質組成にもその特徴が現れている。寂地川の河川水については成分量が少なく、雨水のような組成の水である。

なお、地下水の無機汚染の指標の一つになっているNO₃⁻成分については全般に低い。出合清水だけは20 mg/lを超えていた。これは市街地の住宅密集地にある湧水であり、いくぶん汚染の進行が心配



第12図 水質の表示図(数字は名水番号)

される。

4. おわりに

今回は中国地方に位置する11ヶ所の名水百選およびその他に関して述べてきた。この他にも、鳥取県では「因伯の名水」として17選、島根県では「島根県の名水」として、くらしの清水・ふるさとの滝・ふるさとの清流・歴史の泉という区分で計100選がそれぞれ県選定の名水として選ばれている。また、岡山県・広島県・山口県でも名水百選以外に幾多の名水が存在している。これらの中では、やはり広島原爆献水が特殊な名水として挙げられよう。水そのものの性質や周辺の景観などの点に異彩を放つというのではなく、どこにでも存する水ではあるが、その由来・経緯に特別な思いが感じられる。しかしながら、献水については記念式典のニュース映像等にはあまり出てこない点もあって、関係者以外の人々にはほとんど知られておらず、一般にはなじみのない儀式であるが、献花と同様に重要な式典のプログラムとなっている。すなわち、これら原爆献

水の名水について、広島の人々にとっては生活に密着した水というより、平和を祈念し犠牲者を慰霊するための特別な水となっている。

文 献

- 地質調査所(1992)：100万分の1日本地質図，第3版。
 藤井厚志(1988)：秋吉台の地下水と別府弁天池湧水。アーバンクボタ，27，表紙。
 猪木幸男・村上允英・大久保雅弘(1987)：日本の地質7・中国地方。共立出版，290p。
 小出 博(1972)：日本の河川研究。東京大学出版会，254-259。
 西垣 誠・島野安雄(1991)：名水を訪ねて(13)岡山の3名水。地下水学会誌，33，51-58。
 佐々木 健・西村良司・荒谷昌弘(1992)：名水を訪ねて(17)広島の名水。地下水学会誌，34，45-52。
 佐々木 健(1989)：広島・中国路 水紀行。漢水社，217p。

SHIMANO Yasuo and NAGAI Shigeru (1995): Travels of Japanese valuable waters (8) Chugoku area.

〈受付：1994年9月1日〉